Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-14

「国文論叢」既刊総目次

(Citation)
國文論叢,50:65-78

(Issue Date)
2016-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011674

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011674

「国文論叢」既刊総目次

第九号　一九八二年三月

復刊にあたって　藤岡　忠美
碧梧桐と自然主義　相馬　庸郎
古今撰者時代の私的歌会　徳原　茂実
仁和寺和歌圏と顕昭―覚性法親王時代における―　西村加代子
『発心集』巻一・巻二の主題展開　山本　一
―『方丈記』をも念頭に置きながら―
『羽鳥千尋』における鷗外の創意　林　正子
『国文論叢』総目次（創刊号～第八号）
『国文神戸』総目次（創刊号～第三号）
『国文学研究ノート』総目次（創刊号～第十四号）
編集後記

第十号　一九八三年三月

伊勢集序説―伊勢日記冒頭歌覚え書き―　藤岡　忠美
助動詞「む」に原因推量の用法は認められるか　鈴木　義和
―上代語における考察―
花散里形象の具体化とその意義　広瀬　唯二
―夕霧とのかかわりをめぐって―
『吉野葛』論―言語的歩行者の語りとして―　高桑　法子
イロニーの終焉　和田　博文
―『わがひとに與ふる哀歌』から『春のいそぎ』へ―
編集後記

第十一号　一九八四年三月

『発心集』説話の貴族たちと長明　田中　宗博
―公経・統理・顕基をめぐって―
範疇としての「孝」―熊沢蕃山『孝経小解』論―　永吉　雅夫
富士谷御杖の初期歌論　常吉　幸子
―刊本『歌道非唯抄』及び『古今和歌集』―
「闇中政治家」の位相　林原　純生
―明治二十年代の文学に関しての試論―
日本の超国家主義における美学と政治学　野口　武彦
―三島由紀夫と北一輝を中心に―
目次
『国文論叢』（前号・前々号）
『国文学研究ノート』（第三号～第十六号）
編集後記

第十二号　一九八五年三月

金沢文庫本『仏教説話集』の説話　池上　洵一

『弁乳母集』序説　片山　剛
新出・遊行寺本『讃岐典侍日記』について　梅谷　繁樹
顕昭の古今伝授と和歌文書　西村加代子
万葉集におけるヤ・カの上接語句について　田中　敏生
　―ム述語文のばあいを中心に―
自己客観化の過程　武田　信明
　―大正末期の牧野信一の諸作について―
編集後記

第十三号　一九八六年三月

夢告説話と『法華経』　小林　直樹
『発心集』の境界離脱譚　田中　宗博
長明の凡愚意識と説話採録態度について　西村　健司
　―『発心集』（28）・（32）話をめぐって―
了意における〈批判〉の特性（続）　常吉　幸子
　―『徒然草』及び和歌等の利用をめぐって―
接続助詞「と」の用法と意味　鈴木　義和
編集後記

第十四号　一九八七年三月

『平凡』―その文体の成立と位置―　西村　好子
「我等の一団と彼」と啄木　若林　敦
　―作者の位置を手がかりとして―
『銀の匙』論―〈想起〉という方法―　森本　隆子
「父を賣る子」前後から「鏡地獄」まで　鎌田　広己
　―牧野信一の初期作品に認められる「知」の視点で―
「叫び」の終焉　田中　敏生
　―『近代能楽集』における告白の変貌―
編集後記

第十五号　一九八八年三月

枕草子日記的章段における表現の一方法　中島和歌子
　―「がうな」の段の「笑ひ」を中心に―
永井荷風論―対話体への考察から―　真銅　正宏
『人間失格』へのある視点の試み　鎌田　広己
　―『蜘蛛女のキス』との比較において―
「～ぬか（も）」の表現について　徐　一平
ノダ形式の構造と表現効果　吉田　茂晃
編集後記

第十六号　一九八九年三月

藤原清輔の昇殿と応保二年内裏御会　西村加代子
『中外抄』試論　田中　宗博
ヴィジョンと推究　田中　敏生
　―徂徠注釈書における「古語」の指摘をめぐって―
『走れメロス』試論　鎌田　広己

—主人公の〈肉体〉と〈自意識〉を主題として—　山崎　勝昭
編集後記

第十七号　一九九〇年三月

紫式部と漢文学—宇治の大君と〈婦人苦〉—　藤原　克己
「宇治拾遺物語」拾穂抄
—連想の契機と言語遊戯をめぐって—　梅谷　繁樹
『土佐日記燈』成稿本の成立とその事情
—作業としての〈解釈〉の意義について—　常吉　幸子
二葉亭四迷の文学論と俳句の間
人称の解体—もう一つの第一人称—　西村　好子
萩原広道年譜攷　真銅　正宏
編集後記　山崎　勝昭

第十八号　一九九一年三月

枕草子「香炉峯の雪」の段の受容をめぐって
—中世・近世の説話集を中心に—　中島和歌子
『今昔物語集』の孝養譚攷
—船橋家本『孝子伝』の受容を中心に—　文　明載
近代〈批評〉における漢文体の位置
—馬琴受容をめぐっての一試論—　山本　和明
昭和十一年の浪花節—『墨東綺譚』の一側面—　真銅　正宏
『右大臣実朝』論　藤原　耕作
萩原広道の和歌　山崎　勝昭
『国文論叢』総目次（第九号～第十七号）
編集後記

第十九号　一九九二年三月

『今昔物語集』構想の波紋
—説話集の構想による説話の変容—　文　明載
夢の憂橋—永代橋落橋一件始末—　山本　和明
「八木立札、又は《いかがわしい》者について。」
「山月記」の位置—〈この私〉が生きるとは—　山崎　勝昭
現代日本語の時制組織について　中森　康之
直接言語行為　吉田　茂晃
神戸大学文学部国語国文学会研究部会規約　張　勤
『国文論叢』投稿規定
（以下、規約・投稿規定と略す）
編集後記

第二十号　一九九三年三月

「開物学」の発想について
—『均緜三十六則』を中心に—　浜田　秀
『志都能石屋』考
—平田国学における「幽冥」と「医道」—　朴　鍾祐
「富の市」の主題的連続性と変容　三品　理絵

—『黒猫』から『誓之巻』へ—　長濱　拓磨
『幻影の盾』試論—厭生感情と女性造型—　北川扶生子
大国隆正と萩原広道—一つの但し書き　山崎　勝昭
規約・投稿規定
編集後記

第二十一号　一九九四年三月

享保時代の江戸俳壇　和推（二世調和）の動向　松尾真知子
支考俳論の特質—「諷諫」という滑稽釈義—　中森　康之
綾足の片歌理論—その論理に潜む可能性の探究—　川西　元
村田春海『歌がたり』成立試論　田中　康二
漱石『文学論』への私註—〈趣味〉の分類学—　福井　慎二
太宰治『新ハムレット』とその周辺　藤原　耕作
『司馬遷』への道程
—武田泰淳文学の初期について—　謝　崇寧
規約・投稿規定
編集後記

第二十二号　一九九四年九月

「言葉の幻惑」と「国家の幻惑」　西村　好子
—『吾輩は猫である』論—
漱石『文学論』の科学性についての予備的考察　福井　慎二
『荒魂』論　川西　元
椎名麟三『美しい女』論　長濱　拓磨
—戯曲からのアプローチ—
ルビによる西洋受容—明治期永井荷風の文体模索—　真銅　正宏
規約・投稿規定
編集後記

第二十三号　一九九五年四月

副助詞「など」について—とくに「否定的強調」「軽視・謙遜」
の意味を帯びる場合について—　加波（三宅）尚子
篤胤の歌論とその周辺　朴　鍾祐
志賀重昂『日本風景論』　福井　慎二
—地理学とナショナリズム—
漱石『虞美人草』論—謎としての母—　北川扶生子
「自己発見」の行方　謝　崇寧
—武田泰淳「上海もの」を中心として—
百人一首成立試論　徳原　茂実
規約・投稿規定
編集後記

第二十四号　一九九六年五月

永積安明先生の御逝去を悼む
『和歌体十種』を読む　山本　一
渾淪への回帰—徂徠「文」解釈の意味するもの—　田中　敏生

篤胤国学における救いの構造
―『霊能真柱』の世界観を中心に―　朴　鍾祐
言語行為と主観経験―モダリティの二側面―　張　勤
永積安明先生著作年表〔補遺〕
規約・投稿規定
編集後記

第二十五号　一九九七年三月

『奥義抄』に見られる『万葉集』歌
―その独自本文について―　芦田　耕一
『今昔物語集』天竺部考―本生譚の特質を中心に―　金　泰光
「悪行」篇の世界
―『今昔物語集』巻二十九のために―　横田　隆志
村田春海の和文体
―「堂楼亭閣の記」における漢文的趣向をめぐって―　田中　康二
澁澤龍彦『高丘親王航海記』論
―迷宮の楽しみ方、あるいは探し求める人について―　小谷口　綾
規約・投稿規定
編集後記

第二十六号　一九九八年三月

『三宝絵』上巻の配列構成
―菩薩の修行階位の説話的反映―　金　泰光
新出本『奥の細道』の性格
―底本修正問題をめぐって曽良本へ―　中森　康之
『織錦斎随筆』成立試論　田中　康二
幸田露伴「蒲生氏郷」論　川西　元
事態選択形式に関する一考察
―「ルほうがいい」と「タほうがいい」―　曺　美庚
規約・投稿規定
編集後記

第二十七号　一九九九年三月

追悼　猪野謙二先生
『金沢文庫本仏教説話集』の無言太子譚についての一考察　金　泰光
『今昔物語集』における情愛・性　横田　隆志
齋藤緑雨と文士保護問題　天野　勝重
猪野謙二先生追悼小特集
猪野謙二先生追慕
―『僕にとっての同時代文学』を中心に―　相馬　庸郎
一九九七年・最後の年と神戸回想　島本　昌一
猪野謙二先生著作目録（続ならびに補遺）
猪野謙二先生遺稿
近代日本の明暗―諭吉と漱石―
複合名詞の音韻構造：神戸方言の場合　藤原多賀子
規約・投稿規定

編集後記

第二十八号　一九九九年三月

尊子内親王と『三宝絵』序説　横田　隆志
『有明の別れ』の女君　若林　薫
　―物語の主題と方法をめぐって―
『太平記』における佐々木道誉像　奥　智鶴
『江戸職人歌合』考　石原　隆好
規約・投稿規定
編集後記

第二十九号　二〇〇〇年三月

浮舟物語と初瀬の観音霊験譚　若林　薫
『時秋物語』生成過程考　内田　澪子
　―類似説話の検討を通して―
『浮城物語』の国家意識　表　世晩
　―西南戦争と上井清太郎の「常情」を中心に―
広津柳浪『今戸心中』試論―女主人公の孤立―　全　美星
反・学校小説『坊っちゃん』　西村　好子
規約・投稿規定
編集後記

第三十号　二〇〇一年三月

池上洵一先生退官記念　林原　純生
池上先生の御退官にあたって　池上　洵一
池上洵一先生略歴・著書目録
「私の説話・伝承研究史」　樋口　大祐
　―神戸大学文学部最終講義―
一向一揆と文学・序論　若林　薫
　―ある対抗的「語り」についての覚書―
『源氏物語』から『山路の露』への階梯　表　世晩
　―女君の道心と恩愛―
明治二十年代の「南進論」を越えて　全　美星
　―矢野龍渓『浮城物語』の国際感覚―
広津柳浪「河内屋」論―「重ね妻」という認識―　大村　治代
中里介山『大菩薩峠』試論
　―「甲源一刀流の巻」成立に関する考察―
『国文論叢』既刊総目次
編集後記

第三十一号　二〇〇一年十二月

野口武彦先生退官記念　林原　純生
野口武彦先生の御退官にあたって
野口武彦先生略歴・著書目録
「一八六八年・神戸」―神戸大学文学部最終講義―　野口　武彦

『契沖法師富士百首』序文攷　田中　康二
「春情」の目覚め　木越　俊介
　―『桟道物語』から『環草紙』へ―
幸田露伴『一国の首都』試論　天野　勝重
　―「奠都三十年祝賀会」との関連を中心に―
「事実」の時代　相馬　庸郎
　―明治三、四十年代別見―
〈資料紹介〉柴五郎の投書　林原　純生

第三十二号　二〇〇二年八月

特集　アジアの中の「国文学」
寂しい近代―「満韓ところ〴〵」論―　西村　好子
李　相協『海王星』論　全　美星
　―黒岩涙香『巌窟王』との比較を通して―
〈報告〉
アジアにおける〈国文学〉　楊　錦昌
　―台湾の〈日本文学研究〉の一端―
〈コラム〉
陶然、そして呆然―タイで考えたこと―　池上　洵一
〈国文学者〉と青年模範文　林原　純生
アジアにおける国文学　Nanchaya Mahakhan
　―曖昧な「国文学」という言葉から見られる世界観―
〈翻刻〉
内閣文庫本『長谷寺蜜奏記』―翻刻と解説―　内田　澪子

第三十三号　二〇〇三年三月

いわゆる「上代特殊語法のズハ」の解釈　鈴木　義和
　―推量型、勧誘・意志型の場合―
後三条天皇と護持僧・成尊　奥田　静代
　―後三条天皇即位譚をめぐって―
内田魯庵の歴史認識と文学観　崔　範洵
　―「現代文学」における「政府」と「民間」の構図を中心に―

第三十四号　二〇〇四年三月

特集　歴史と文学
字余りの史的研究―宣長及びそれ以前を中心に―　毛利　正守
『霊異記』の描く長屋王　寺川眞知夫
光源氏の須磨退去の罪は何か　日向　一雅
　―除名説・左遷説の再検討―
『源氏物語』朱雀朝前期の政治状況について　村口　進介
『無名草子』と歴史物語　高橋　亨
小考　歴史から文学への一階梯　中村　康夫
『大鏡』と『栄花物語』続編　福長　進
『殿暦』から見る藤原忠実の愛染王信仰　奥田　静代
平重盛の四天王寺万灯会について　高橋　昌明
映画『もののけ姫』分析　市沢　哲
　―歴史ファンタジーに歴史学はどう関わるか―
〈開かれた文学〉〈換喩的文学〉としての『平家物語』

—「額打論」を中心に—　美濃部重克

第三十五号　二〇〇四年三月

後朱雀天皇の乳母達　陳　斐寧
小栗風葉『青春』試論—肉欲の行方を中心に—　武藤　史子
内田魯庵の翻訳と日清戦争　崔　範洵

第三十六号　二〇〇六年七月

特集　長谷寺研究
長谷寺対外霊験譚の構造　池上　洵一
—長谷寺「唐朝馬頭夫人」説話と勝尾寺「百済国王后」説話—
『長谷寺験記』成立年代の再検討　藤巻　和宏
—長谷寺炎上と「行仁上人記」—
『長谷寺験記』の編纂過程に関する一考察　奥田　静代
『長谷寺験記』の年代注記　奥　智鶴
中世長谷寺史の再構築　上島　亨
作品紹介　木造十一面観音立像（長谷寺式）　寺島　典人
重要文化財　木造地蔵菩薩立像　像内納入品のうち　奈良市・伝香寺蔵
長谷寺本・伝遊行三十七代託資上人筆『長谷寺縁起文』　横田　隆志
—翻刻と解説—
禁裏旧蔵の『長谷寺密奏記』　内田　澪子
—高松宮家伝来禁裏本『十一面観音縁起』紹介・翻刻—
『諸嗣宗脈紀』抄—法相宗部—　宇都宮啓吾
中世長谷寺キーワード小辞典　横田隆志　他

第三十七号　二〇〇七年三月

阿伝偽供　林原　純生
—明治十年前後の「告白」をめぐる文学と法の関係について—
謡曲〈井筒〉の表現世界—背景としての「石上」—　原田　寛子
糟谷から読む『太平記』　奥　智鶴
『御湯殿上日記』の基礎的研究　北上　真生
—執筆方法・執筆者について—
安岡章太郎の戦争表現　金岡　直子
—「戦下」の日常に着目して—
山田風太郎『天衣無縫』試論　佐藤　淳
—「前期明治もの」に関する考察—

第三十八号　二〇〇七年七月

特集　明治初期の翻訳・翻案文学—もう一つの近代文学の源—
円朝『怪談牡丹燈籠』と演劇　出口　逸平
漱石とオカルト　西村　好子
—初期翻訳「催眠術」（Ernest Hart, M.D.）を巡って—
姦通の美文　福井　慎二
—漱石『薤露行』とテニスン・マロリー—
江戸とロンドンのあいだ　北川　扶生子

—夏目漱石『文学評論』におけるアディソン、スティール論—　天野　勝重
『新体詩抄』から「新体詩見本」へ
—日清戦中文学の一視点—　三品　理絵
翻案作家としての長谷川天渓
—「鏡世界」と「人魚」—　真銅　正宏
荷風初期の翻訳または翻案
—ゾライズム移入の実態—　林　正子
〈批評〉と〈革命〉としての翻訳文学
—石川淳『森鷗外』における〈精神の運動〉の軌跡—　目黒　強
若松賤子訳「セイラ、クルーの話。」にみるジェンダー

第三十九号　二〇〇七年十二月

西本願寺本三十六人集「躬恒集」の漢詩を巡って　丹羽　博之
秘琴伝授とあて宮の視座
—『うつほ物語』「国譲」巻の表現形成—　江戸　英雄
宣旨の娘と光源氏
—歴史上における宮内卿補任を手掛かりに—　陳　斐寧
資料紹介　神戸大学附属人文科学図書館蔵『名廣澤邊萍』初・二・三編翻刻　佐藤　淳

第四十号　二〇〇八年三月

平安文学における渡殿の役割　水田　ひろみ
—恋愛発生の場として—　石山　貴裕
〈あはれ〉の自己希求表現
—『源氏物語』柏木巻を軸として—　北上　真生
近世期における女房日記の視点と方法
—長橋局による記録を中心にして—　佐藤　淳
京文舎文京『名広沢辺萍』試論
—発禁処分をめぐって—　浦野　剛司
澁澤龍彦『高丘親王航海記』の夢

第四十一号　二〇〇九年三月

芍薬亭長根『坂東奇聞濡衣双紙』考
—『通俗金翹伝』の利用法を中心に—　天野　聡一
『相州奇談真土酒月畳之松蔭』試論
—近代日本出発期の一側面—　松原　真
明治民法と民法小説
—明治民法と文学についての覚書—　林原　純生
李恢成文学における「サハリン」
—『またふたたびの道』から『百年の旅人たち』へ—　梁　明心
受影受動文の事象構造とイメージスキーマ　住田　哲郎
パロディとしての正義漢
—『坊っちゃん』をめぐる漱石とホトトギス派の写生文の抗　福井　慎二

第四十二号　二〇一〇年三月

争―　勝田　真由子
国策と文学者―太宰治「水仙」試論―　浦野　剛司
澁澤龍彦と政治―敗戦直後の活動、六〇年安保―　多田　知子
複合接続詞
―文の文頭部分の階層性―　李　瑩瑩
上代漢字文献における「矣」の用法

第四十三号　二〇一〇年十二月

特集　国際関係の中の日本語研究
平家物語諸本と中世語
―延慶本の言語年代をめぐって―　山本　真吾
表記史的現象としての表記習慣
―東大寺文書の「着到」を例として―　矢田　勉
日本語と韓国語の条件文の対照研究　鈴木義和・孫哲
日本語とモンゴル語の補助動詞の対照研究　巴　徳　瑪
―「～ておく」と「talbiqu（おく）」についての一考察―
日本語願望表現の用法再考　米澤　優
―小説の中国語訳を手がかりに―
幕末期における外国地名受容法の揺れについて　横田きよ子
―柳河春三を例として―
国立国語研究所設置をめぐる二、三のことども　安田　敏朗
「音節」・「モーラ」と『字余り』　宮澤　俊雅

第四十四号　二〇一一年三月

『義経記』の義経主従　藪本　勝治
宮崎夢柳「憂き世の涕涙」の成立　林原　純生
―原本『The Gentle Savage』との比較対照から―
『自由艶舌女文章』論　中山　兼作
―政治小説に込められた政治的意図―
自然主義と道徳　木村　洋
―正宗白鳥の初期作品をめぐって―
澁澤龍彦とアナーキズム　浦野　剛司

第四十五号　二〇一二年三月

芭蕉の発句「いざよひのいづれか今朝に残る菊」における「十日菊」考　黄　佳慧
心学書に描かれた怪異　門脇　大
―心から生まれる怪異をめぐって―
魯文、社長を辞す―明治一五年の文壇―　松原　真
澁澤龍彦『高丘親王航海記』のユートピア　浦野　剛司
万葉歌における「也」字の用法について　李　瑩瑩
日本語とモンゴル語の補助動詞の対照研究　巴　徳　瑪
―「～てくる」と「irekü」についての一考察―

第四十六号　二〇一三年三月

『黒白染分轡』と相馬事件　魯　恵英
満州国における恋愛と建国
　―長谷川濬「烏爾順河」をめぐって―　魏　舒林
中国人日本語学習者の会話における終助詞に対する母語話者評価　木曽美耶子
申し出表現の形式
　―日本語・中国語・英語・韓国語の対照研究―　楊　吟

第四十七号　二〇一三年九月

特集　林原純生先生御退職記念
林原先生のご退職にあたって　鈴木　義和
林原純生先生　略歴・著述目録
宮崎夢柳訳『佛國史談　義勇兵』について　林原　純生
　―フランス革命と翻訳―
時事文学の政治小説化
　―中島市平編『民権泰斗板垣君近世紀聞』の成立をめぐって―　松原　真
明治二〇年代における「大家」登場の意味　天野　勝重
黒岩涙香の翻案方法
　―ボアゴベ『鉄仮面』から『正史実歴　鉄仮面』への変容―　全　美星
永井荷風『地獄の花』にみる社会的要素としての〈家庭〉　武藤　史子
写生文からの脱却　福井　慎二
　―「二百十日」・「野分」における漱石の逆説的試み―
政治の失墜と自然主義―一九〇八年前後の文壇―　木村　洋
自然主義隆盛下の泉鏡花
　―幻想の〈技法〉構築について―　安藤　香苗
異郷に響く歌―日系アメリカ移民が見た〈日本〉―　北川扶生子
田村俊子「魔」論　高田　晴美
太宰治『新釈諸国噺』論　藤原　耕作
価値の顚倒―石原慎太郎「太陽の季節」―　金岡　直子
遠藤周作初期作品のエクリチュール
　―「手記」をめぐって―　長濵　拓磨
澁澤龍彦のシュルレアリスム　浦野　剛司
山田風太郎『幻燈辻馬車』試論　佐藤　淳

第四十八号　二〇一四年三月

漢音声調における上声・去声間の声調変化
　―日本漢文の場合―　石山　裕慈
『大鏡』の道長造型―「才」との関係をめぐって―　中瀬　将志
明治前期の出版物における平仮名字体の使用傾向について　ダニエル・小林ベター
文接続の接続表現の分類について　鈴木　義和

第四十九号　二〇一五年三月

読書としての戦争体験　梶尾　文武

—井上光晴「ガダルカナル戦詩集」と戦中派の思想—
『源平盛衰記』における建礼門院と四季　吉田　后希
シンポジウム「国語教育の現状と課題」
西村好子・藪本勝治・石堂有紀・川端優樹・石山貴裕

第五十号　二〇一六年三月

後宮の細殿—その特質と役割をめぐって—　天野ひろみ
『義経記』と山科に関する一考察　斉賀　万智
—山科家という視点から—
大学生会話におけるスピーチレベル　賈　璐
—発話機能という枠組みから—
発話スタイルのパターンに見るキャラクタの考察　住田　哲郎
—韓国語翻訳との比較から—

「国文論叢」既刊総目次　執筆者索引

あ行

芦田　耕一　25
天野　勝重　27 31 38 47
天野　聡一　41
安藤　香苗　47
池上　洵一　12 30 32 36
石堂　有紀　49
石原　隆好　28
石山　貴裕　40 49
石山　裕慈　48
市沢　哲　34
上島　亨　36
内田　澪子　29 32 36
宇都宮啓吾　36
梅谷　繁樹　12 17
浦野　剛司　40 42 44 45 47
江戸　英雄　39
大村　治代　30
奥田　静代　33 34 36
奥　智鶴　28 36 37

か行

梶尾　文武　49
片山　剛　12
勝田真由子　42
門脇　大　45
金岡　直子　37 47
加波（三宅）尚子　23
鎌田　広己　14 15 16
賈　璐　50
川西　元　21 22 26
川端　優樹　49
木越　俊介　31
魏　舒林　46
木曽美耶子　46
北上　真生　37 40
北川扶生子　20 23 38 47
木村　洋　44 47
金　泰光　25 26 27
小林　直樹　13
小谷口　綾　25

さ行

斉賀　万智　50
佐藤　淳　37 39 40 47
島本　晶一　27
謝　崇寧　21 23
徐　一平　15
全　美星　29 30 32 47
鈴木　義和　10 13 33 43 47 48
真銅　正宏　15 17 18 22 38
住田　哲郎　41 50
相馬　庸郎　9 27 31
曺　美庚　26
孫　哲　43

た行

高桑　法子　10
高田　晴美　47
高橋　亨　34
高橋　昌明　34
武田　信明　12
多田　知子　42
田中　康二　21 25 26 31
田中　敏生　12 14 16 24
田中　宗博　11 13 16
ダニエル・小林ベター　48
崔　範洵　33 35

張　勤 19 24
陳　斐寧 35 39
常吉　幸子 11 13 17
出口　逸平 38
寺川眞知夫 34
寺島　典人 36
徳原　茂実 9 23

な行

中島和歌子 15 18
中瀬　将志 48
中村　康夫 34
中森　康之 19 21 26
中山　兼作 44
長濵　拓磨 22 47
永吉　雅夫 11
Nanchaya Mahakhan 32
西村加代子 9 12 16
西村　健司 13
西村　好子 14 17 22 29 32 38 49
丹羽　博之 39
野口　武彦 11 31
魯　恵英 46

は行

朴　鍾祐 20 23 24
巴　徳瑪 43 45
浜田　秀 20
林　正子 9 38
原田　寛子 37
樋口　大祐 30
日向　一雅 34
表　世晩 29 30
広瀬　唯二 10
黄　佳慧 45
福井　慎二 21 22 23 38 42 47
福長　進 34
藤岡　忠美 9 10
藤原　克己 17
藤原　耕作 18 21 47
藤原多賀子 27
藤巻　和宏 36
文　明載 18 19

ま行

松尾真知子 21
松原　真 41 45 47
三品　理絵 20 38
水田（天野）ひろみ 40 50
美濃部重克 34
宮澤　俊雅 43
武藤　史子 35 47
村口　進介 34
目黒　強 38
毛利　正守 34
森本　隆子 14

や行

安田　敏朗 43
矢田　勉 43
藪本　勝治 44 49
山崎　勝昭 17 18 19 20
山本　和明 18 19
山本　真吾 43
山本　一 9 24
梁　明心 41
楊　錦昌 32
楊　吟 46
横田きよ子 43
横田　隆志 25 27 28 36
吉田　茂晃 15 19
吉田　后希 49
米澤　優 43

ら・わ行

李　瑩瑩 42 45
林原　純生 11 30 31 32 37 41 44 47
若林　敦 14
若林　薫 28 29 30
和田　博文 10